進路通信 vol.9 令和 8 年 1 月 20 日（火） 昌平高校進路指導部

■海老名さん、東京外国語大学に合格！！

3 年 4 組の海老名凛乃さんが見事、東京外国語大学の国際日本学部国際日本学科に合格しました。本校から東京外国語大学に合格したのは初めての快挙です。

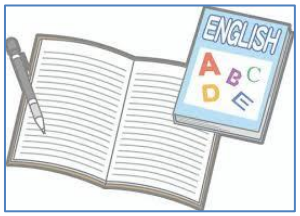
本校はこれまで、難関国公立大学については、東北大学、筑波大学、福島県立医科大学などの理系学部・学群への進学者が多く出ていました。これは、成績優秀者が理系の大学を目指しているケースが多かったことも関係していたかと思います。加えて、数学の成績が比較的良い生徒が多かったこともその理由の一つとして考えられます。

海老名さんは英語を得意としている一方、筆者が担当する公民科などの科目についても 1 年生のときから好成績を収めており、その積み重ねが見事に難関突破につながりました。

後輩のみなさんも下記の「合格体験記」を参考にして、自分の可能性にチャレンジしてほしいものです。

ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー

【合格体験記】　海老名凛乃さん（3 年 4 組）
東京外国語大学国際日本学部国際日本学科合格（学校推薦型選抜）



私は、東京外国語大学国際日本学部の学校推薦型選抜に合格することができました。

私が東京外国語大学国際日本学部を志望校として考え始めたのは、高校 3 年の春でした。そのため、オープンキャンパスはオンラインで一度しか参加できませんでした。しかし、それが志望するきっかけになったので、来校型でもオンラインでもオープンキャンパスへの参加は大切だと感じました。後に現地へ向かい、雰囲気や立地を確認した上で、第一志望に決定しました。

まず、出願資格や条件についてですが、これは大学ごとに変わります。私の場合、出願資格として、CEFR の B2 以上の英語 4 技能資格検定スコアが必要でした。私はそれに値する英検のスコア 2300 点以上の獲得を目指しました。対策にあたり、語彙力とライティングに特に力を注ぎました。単語帳、スマートフォンアプリ、対策動画を目的に応じて活用しました。単語を見て瞬時に意味を思い出せることを目標にし、隙間時間と就寝前の記憶が定着しやすい時間に学習しました。2 度目の受検で条件を満たし、準 1 級を獲得することができました。事前に自分の志望校の要項を確認すること、そしてその条件を満たすために努力することは大事だと感じました。

受検を目的にしたわけではありませんが、様々な経験をすることが合格の鍵の一つになるかもしれません。高校3年の夏休みに、いわき―カウアイともだちアロハ事業で市の代表として、ハワイ州カウアイ郡へ約1週間のホームステイをしました。ホストファミリー一人ひとりの名前に良い意味の漢字を当てはめて書道で書いたものをそれぞれ説明して贈りました。また、ハワイの英語のスラングについて質問したところ、移民とのつながりも深い「ピジン」という言語に出合うことができました。さらには、日本文化の浸透を目の当たりにしたり、カウアイ島に人種差別のない多文化共生社会が成り立っていることに感動したりしました。このことが、自分の中の素晴らしい体験となり、大きな強みとなったのだと思います。それ以外にも、ブリティッシュヒルズでの英語研修や英会話部主催の異文化交流会、グアムでの英語での学校代表挨拶、探究活動、近所で開催される外国人との交流イベント、部活動など、幼少期から高校3年までの様々な活動が非常に強固な支えとなりました。自分の興味があることには積極的に働きかけることが大切だと実感しています。

入試は第一次審査と第二次審査の構成で行われました。前者は志望理由書と活動報告書の書類審査、後者は小論文と面接です。志望理由書では、自分がやりたいこと、その実現のためにどれだけ志望校での学修が不可欠であるかを親や先生と相談しながら言語化していきました。これまで関わってきた国際交流や部活動について書きました。自分をアピールするために、自分の経験と志望理由書がつながることを意識して文章を作り、より印象付けるために添削資料として写真も付けました。どちらも文字数が多く、黒ボールペンで自筆するため、丁寧な文字を心掛け、清書にもかなり時間がかかりました。ミスするたびに書き直したため、余裕を持って準備することが大事です。

小論文は、大学に直接行かなければ過去問を見ることができなかったので、ChatGPT や Google Gemini を使って練習問題を出してもらい、自分の論文を添削してもらうことを何度も繰り返しました。私は内容にこだわってしまう傾向があったので、時間内に字数を守って書き終えることを優先して行いました。面接は、志望理由書などの書類に書ききれなかった強い思いを伝えることができる機会だと捉えていました。また、どのような質問でも、志望理由につながる筋の通った回答をすることを強く意識しました。練習は先生や友人に協力していただきました。

結果は合格となりましたが、その過程で様々な失敗もしました。英検のスコアの証明方法を誤解して大学に問い合わせたり、書類の清書がうまくいかず切羽詰まったり、本番で腕時計を携帯し忘れてひっ迫したりと様々な反省点があります。今後、同じ失敗をしないようしっかり踏み台にしたいと思います。

私が合格できたのは、日本語教師として人と人との架け橋になりたいという私の目標と大学でできることが合致していたこと、そして大学で学びたいという意志、さらにそれを伝えた書類や面接で、一本の筋が通っていたからだと思います。この一貫性と強い思いが鍵になったのだと思います。

最後に、受験を通して人の存在のありがたみ、人とのつながりを感じました。様々な人がいるからこそ、成し遂げられるのだと強く思います。今まで私の人生に関わってくださった方々に心から感謝しています。

■教育実習生からのメッセージ

秋に保健体育の教育実習をされた日本体育大学の松浦由渚先生に、実習の感想やみなさんへのメッセージを書いていただきました。本来であれば、もう少し早く掲載したかったのですが、第７号と第８号で３年生の「合格体験記」が紙面の多くを占めたため、今回の掲載となりました。授業等でお世話になった諸君は多いことと思います。

―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―

教育実習の感想

松浦由渚（日本体育大学体育学部体育学科）

教育実習の３週間を通して、学校現場で教えることの難しさとやりがいについて強く実感しました。授業づくりでは、自分が曖昧に理解している内容は生徒にも伝わらないことを痛感し、教材研究や準備の大切さを改めて学びました。

体育では、一人一人の体力や得意不得意に合わせて声かけや補助を工夫することで、生徒が安心して挑戦できる環境を作ることができました。特に、運動が苦手な生徒が跳び箱を成功させた瞬間に、友達と一緒に喜ぶ笑顔を見ることができたのは何よりの喜びでした。

保健の授業では、生徒が自分の考えを言葉にする姿や、友達の意見を聞いて考えを深める様子に感動しました。授業中に生徒同士が意見交換し合う場面では、私も共に学びながら進める楽しさを感じました。

また、ホームルームや清掃の時間では、生徒たちが自発的に協力したり、互いに助け合ったりする姿から学ぶことも多くありました。

短い時間でしたが、先生方の温かいご指導と生徒たちの明るさに支えられ、多くの学びと気づきを得ることができました。この経験を大切にし、今後に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―

松浦由渚先生と同じ時期に４名の教育実習生が本校で実習しました。そのうち、本紙第６号で掲載しましたが、菅野竜太郎先生には教育実習の感想を書いていただきました。他の３名の教育実習生には書いていただく機会を逃してしまいましたが、いずれも「教えることの難しさ」を話していました。

■久米宏さん死去

1967 年に早稲田大学政治経済学部を卒業後、TBS にアナウンサーとして入社し、1979 年からフリーに転身して活動していた久米宏さんが 1 月 1 日に 81 歳で亡くなりました。このニュースは 1 月 13 日（火）に報じられましたが、筆者は初めまったくピンと来ませんでした。その日のテレビ朝日の報道番組『報道ステーション』で大きく時間を割いて取り上げていました。

久米さんは 1985 年の 10 月から 18 年半にわたって放送された『ニュースステーション』（※『報道ステーション』の前身）でキャスターを務めていました（※久米さんご本人は何かの機会に「ニュースキャスター」ではなく、「司会者」だということを強調されていましたが…）。それまでのニュース番組とは大きく異なり、「中学生でもわかるニュース番組」をコンセプトにスタートし、筆者も気がつけば毎晩吸い寄せられるように見ていた記憶があります。1 月 13 日の『報道ステーション』では、記憶にある懐かしい映像もずいぶん登場し、改めて久米さんの歯に衣着せぬ物言いというのは、最近のアナウンサーにはあまり見られない唯一無二のものだったのだなと感じました。当時は電話等による番組（※久米さんの発言等）への批判や抗議が多かったようですが、今の SNS の時代だったら、果たしてどんなことになっていたのか空恐ろしい感じもしないではありません。

久米宏さんと聞いても、今の高校生のみなさんは分からないかもしれませんね。1 月 14 日（水）の朝日新聞の天声人語を以下に引用します（※【　　】内）。少しでも久米さんの人となりに関心を持ってもらえたら幸いです。

【ついたあだ名は「番組つぶしの久米」。TBS の新人アナウンサーだった久米宏さんが関わると、なぜか番組は終わってしまう。ラジオの生放送では、緊張で舌がもつれてしゃべれない▼その人が、あの流れるような早口で、いくつもの人気番組を切り回していくことになるのだから不思議なものだ。「ぴったしカン・カン」も、黒柳徹子さんとの「ザ・ベストテン」も軽妙さが持ち味だった▼それだけに、ニュース番組のキャスターをやると聞いた時は驚いた。1985 年の初回だ。「テレビ朝日が命運をかけてお伝えすると言われている『ニュースステーション』、最初の話題は……」。そういうことを嫌みにならず、笑って言える人だった▼番組が先駆的だったことについては多言に及ぶまい。自民党の総裁選では派閥の構図を人形や積み木で示し、御巣鷹での日航機墜落事故の特集では犠牲者 520 人分の靴をスタジオに並べた。「風俗を語るときは政治的に語れ。政治を語るときは風俗を語るように語れ」。座右の銘を地でいった▼ラジオを愛し、テレビを愛した久米さんが 81 歳で亡くなった。その思いや人柄は、18 年半にわたるニュースステーションの最終回に詰まっているように思う▼「僕はこの民間放送が大好きです。国民を戦争に向かってミスリードしたという過去が民間放送にはありません。これからもそういうことがないことを祈っております」。乾杯と言って、コップに手酌で注いだビールをぐっと飲みほした。】

『ニュースステーション』の最終回、筆者もよく覚えています。最終回とはいえ、番組中にビールを飲み干して「本当にお別れです、さようなら」と締めくくる。久米さんならではの逸話と言えるでしょう。当時は、『ニュースステーション』を見ながら、連日電話越しに話している相手がいたな…との思い出も。特に記憶にあるのは、2001 年のアメリカ同時多発テロでニューヨークの世界貿易センターのツインタワーが崩落するニュース映像を見ていて、お互いに叫んでいたときでしょうか。

文責：進路指導部　清水聖